ストライク・ザ・ブラット～氷結の侍～

猫又侍

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

〝絃神島〟　東京の南方海上三百三十キロ付近に浮かぶ人工島。島全体が〝魔族特区〟に指定されており、絶滅の危機に瀕している魔族の保護とともに、彼らの肉体や特殊能力に関する研究が行われている。

その絃神島には、ある噂が存在した。

〝真祖〟闇の血族を統べる帝王。もっとも古く、もっとも強大な魔力を備えた〝始まりの吸血鬼〟。公式に認められている真祖は三名だけで、三つの大陸に、それぞれの自治領である〝夜の帝国〟を築いている。四番目の真祖は、本来は存在しないはずなのだが――

〝第四真祖〟――それは伝説の中にしか存在しないはずの世界最強の吸血鬼。
十二体もの眷獣《けんじゅう》を従え、
災厄を撒き散らすといわれる幻の吸血鬼が、絃神島に出現したという。

そしてもう一つある噂が流れていた、とある一国をたった一人で守り抜き、英雄と称えられるもの、その姿は誰にも分からず、分かる事は〝氷の刀を持つ侍〟と言う証言が多く人々の間ではこう囁かれていた。
〝氷結の侍〟
その氷結の侍もまた絃神島にいると言う…

目次

第1章　聖者の右腕編
聖者の右腕Ⅰ ―― 1
聖者の右腕Ⅱ ―― 14
聖者の右腕Ⅲ ―― 21
聖者の右腕Ⅳ ―― 36
聖者の右腕Ⅴ ―― 48
第2章　戦王の使者編
戦王の使者Ⅰ ―― 57
戦王の使者Ⅱ ―― 67
戦王の使者Ⅲ ―― 78
戦王の使者Ⅳ ―― 89
戦王の使者Ⅴ ―― 99

第1章　聖者の右腕編

聖者の右腕Ⅰ

”絃神島”　東京の南方海上三百三十キロ付近に浮かぶ人工島。島全体が〝魔族特区〟に指定されており、絶滅の危機に瀕している魔族の保護とともに、彼らの肉体や特殊能力に関する研究が行われている。

その絃神島には、ある噂が存在した。

”真祖”闇の血族を統べる帝王。もっとも古く、もっとも強大な魔力を備えた〝始まりの吸血鬼〟。公式に認められている真祖は三名だけで、三つの大陸に、それぞれの自治領である〝夜の帝国〟を築いている。四番目の真祖は、本来は存在しないはずなのだが――

〝第四真祖〟――それは伝説の中にしか存在しないはずの世界最強の吸血鬼。

十二体もの眷獣を従え、

災厄を撒き散らすといわれる幻の吸血鬼が、絃神島に出現したという。

そしてもう一つある噂が流れていた、とある一国をたった一人で守り抜き、英雄と称えられるもの、その姿は誰にも分からず、分かる事は”氷の刀を持つ侍”と言う証言が多く人々の間ではこう囁かれていた。

”氷結の侍(ひょうけつのさむらい)”

その氷結の侍もまた絃神島にいると言う・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ピンポーン♪

ドアの方から軽快なインターホンの音が聞こえる。

「うーい」

ガチャ

ドアを開けるとそのには、白いパーカーを着た青年暁(あかつき)　古城(こじょう)がいた。

「よっ、おはよう洸夜」

古城から洸夜と呼ばれる青年絃神(いとがみ)　洸夜(こうや)は頭を掻きながら出てきた。

「ん、今日は珍しいな古城、お前がこんな朝早くに家に来るの」

「うるせえ!・コッチだって早起きの一、二回位するわ!」

そう言いながら古城は俺に怒鳴りつけてくる

「まぁ、えらい事で流石天下の”第四真祖”様ですな」
そう、コイツ暁古城こそがあの噂の第四真祖なのである。
因みにコイツが第四真祖って知ってんのは俺と後もう一人だったかな。
「それを言うのはやめろ！ほかのやつに聞かれたらまずいだろ！」
「へいへい、分かりましたよ～」
「絶対分かってないだろ！」
「チッ、ほらさっさと飯食えよ凪沙ちゃん先行ったんだろ？」
そう言いながら俺は古城に朝飯を出す
「今舌打ちしたよな?!」
「・・・　してない」
「んじゃ今の間はなんだよ！」
なんでいつもコイツは声がデカいんだ全く
「サッサと食えよ、俺は準備できたかんな」
「お、おう悪いな」
「ま、コッチも迷惑かけてるしお互い様だ」
言ってみれば俺は古城となんらかの腐れ縁があった。
と言うよりも親同士が知り合いだったのだ。

「ったく牙城さんも何で俺とお前を知り合わせたのか未だに分からんな」
「まぁ、あの人は何考えてんのか分からんからな・・・ほれ、俺も準備終わったぞ」
　そうして俺らは家を出た。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　俺達は古城の追試があるためオレともう二人、藍葉(あいば)浅葱(あさぎ)と矢瀬(やぜ)基樹(もとき)と、追試の手伝いをしていた。
「かったりぃ・・・・なぁ、なんで俺は夏休みにこんな大量の追試を受けなきゃならねぇんだろうな?」
　と愚痴を言う古城。
「嫌々、あんだけ授業サボっておまけにテストまで欠席しといて何では無いだろう古城」
　と、すかさず基樹のツッコミが入る。
「そうだぞ、古城流石にテストまで欠席するとは俺も思ってなかったぞ」
　俺は呆れたような声を出して古城に言う。
「アレは不可抗力なんだよ」
　と必死に弁解してくる古城。
「お?」
「ほぅ、不可抗力とは?」

俺と基樹が問いかける。
「俺にも色々事情があって…」
「今の俺の体質じゃぁ朝一のテストが無理って分かってんのにあの担任は…」ボソ
「？」
そりゃそうだわなぁ、古城実際吸血鬼だから朝弱いもんなぁ、ザマァｗ
「朝起きれないって体質の問題？吸血鬼でもあるまいし…」
「うっ」
いつも思うんだが、浅葱ってなんでこう勘が良いんだか……
「だよな、は、はははは」
おい古城顔が引きつってるぞ。
「あっはっは、二人とも寄って集って古城を弄るなよ、コイツ顔引きつってるぞ」
俺は笑いながら浅葱と基樹に言う。
「まぁ、そんなあんたを哀れだと思ってこうして勉強見てやってるんだから感謝しなさいよ」
「人の金でこんなに飲み食いしてそんなに恩着せがましい事言うか?!」
「？別に言うくね？」
「お前もどさくさに紛れて食うな！」

と、俺に向かって古城が言ってくる。
「別に良いじゃん減るもんじゃ無いし」
「俺の財布の中が減るんだけど?!」
「まぁ、そんな事置いといて」
「置いとくか！」
さすが古城、ツッコミの速度が高いな。
「一応言っておくがその金かしたの俺だかんな、ちゃんと返してくれよ、古城」
「え？マジで？おいおい古城、基樹から金巻き上げたのか？そろそろ本格的にヤバいぞ？」
「う、うるさい！分かってるよ、チクショウ」
と見栄を張るがかなり落ち込んでいるな。
「はぁしょうがない今度何か奢ってやるよ」
「マジか！ありがとな洸夜！」
コイツ一気に活力戻しやがったな・・・・
「ま、日頃の礼とでも思って居てくれ」
すると浅葱が立ち上がって帰る準備をする。
「どうした浅葱もう買えんのか？」

「違うわよ、バイトよバイト」
「あ～そういえばお前機械にめっぽう強いもんな」
「ただあんたが弱すぎるのだけだと思うけど」
　すぐに言い返される俺、流石浅葱だな。
「んじゃ俺も帰りますか、宿題写し終わったし、浅葱が居なきゃこんな所で勉強してても意味ないだろ」
「あっ」
「それじゃぁな古城、洸夜」
「おう、またな」
　そそくさと帰る二人
　まぁ、そうなるわな
　さては、古城はめられたな。
「はぁ、やる気無くすぜ…」
「しゃぁ無い、少しだけなら教えてやる」
「お？マジか？ありがとな洸夜！」
「ほんじゃサッサと終わらせて帰るぞ」
　そして俺は古城に勉強を教えながら自分の勉強も終わらせた。

―――――――――――――――――――――――――

「ありがとうございました～」

店を出る俺と古城

「結構進んだか？古城」

「あぁ、洸夜のお陰で大分進んだよありがとな、本当に」

「そりゃどうも」

それにしても暑い流石常夏の島こりゃ干からびてもおかしく無いな。

―――――――――――――――――――――――――

「暑い、焼ける、焦げる、廃になる」

と、四重苦を重ねる古城。

「おい、辞めろ古城コッチがもっと暑くなるだろうが」

「いや、無理だろ、こりゃ」

まぁ、そうかさっきの食事代でモノレールに乗る金すら残っていない。

「てかお前財布持ってないのかよ」

「？いや、家に置いてきた」

「何でだよ！」

いや、基樹に財布いらねぇって言われたからなんだが、それを言ったら俺が基樹に基

樹が古城に殺されかねない。
「まぁまぁそんな事言わずに・・・？」
「？どうした洸夜」
「誰かにつけられてるな」
「？何だお前も気づいたのか」
　おい、もっと先に言えよ、コッチが困るだろ
「それにしてもアレで隠れてるって思ってんのかね」
「まぁ、思ってなきゃやらんだろ」
「それもそうか」
　てか完全にチョッ●ーなんだが・・・
「どうする洸夜」
「とりま様子見るか、そして手頃な所に逃げる」
「手頃なって何処だ？」
「この先にゲーセンがあるそこで良いだろ」
　まぁ、おってな事は確かだなぁ、ま、面倒くさいことにはならんでくれよ、こちとら疲れのんねん。
　ま、善か悪かで決まるだろうな。

「そうと決まれば行くぞ古城」
「あぁ、わかった」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
数分後
絶賛今ゲーセンに向かっている途中なのだが、さっきのストーカー?は未だ付いてきている。
「おい、何なんだ一体」
「・・・まだ追ってくるか」
「さぁな、多分俺の予想だと古城、お前の正体を知っている人間かもしれない」
「は?!何言ってんだよ!俺の正体知ってんの洸夜と那月ちゃんぐらいしかいねぇだろ」
「さぁな、そこがイマイチ分からん」
ただまぁ、こうやって見ると明らかに古城見てんな。
十中八九古城の正体知ってんな。
そう考えているとゲーセンが見えてきた。
「よし、古城中入るぞ」
「あ、あぁ」
俺達がゲーセンの中に入ると一人の女の子が駆け込んできた。

ん？あの制服、うちの学校の中等部の制服だよな？
まさか・・・　な
「なぁ、なんか悪い気がするんだが」
「しょうがないだろ、古城お前が付けられてるって相当怪しいぞ？」
「そりゃそうだけど」
「はぁ、まあ良いサッサとここから出るぞ」
そうしてゲーセンから出ようとした瞬間。
「「あっ」」
そこには俺と古城を付けていた女の子が居るではありませんか。
「！”第四真祖”！」
あっ、やっぱ古城の正体知ってんのね
「おい、どうする古城」ボソ
「どうするったって・・・　おい良い考えがある」ボソ
「おし、今回はお前を信じよう」ボソ
「よし、行くぞ」ボソ
「オウ、ミディスピアーチェ！アウグーリ！」
「は？」

「ワタシ、通りすがりのイタリア人です。日本語、よく解りません。アリヴェデルチ！グラッチェ」
　そうだ忘れてたコイツ筋金入のバカだった。
　はぁ、しょうがない
「せい！」
「ゴフゥ！」
「少し大人しくしとけこのバカ」
　そう言いながら女の子に向かって言う。
「ゴメンなこのバカのせいで迷惑かけて、後その第四真祖っての多分人違いだ、他を当たってくれ」
「え？あ、ちょ！」
　大分慌ててるがなんとかまけそうだな。
　そうして俺たちは近くの物陰に隠れる。
「おい洸夜！本気で腹パンする事は無いだろう！」
「済まんな、こうするしか手段は無かった」
「はぁ、お？出て来たぞ」
　女の子がゲーセンから出て来たと思った瞬間

速攻でナンパされていた。
「うわ、早！ナンパされんの」
てか相手D種やんけ眷獣出されたら”聖域条約違反”になるぞ
こうして俺と古城は女の子を少し見ることにした。
次回　聖者の右腕Ⅱ

聖者の右腕Ⅱ

「ほう、これは中々」
「何変な事言ってんだ洸夜」
俺と古城は女の子が、ナンパされているところを監視していた。
勿論バレない程度に。
「いや、別に良い筋してんなーと思って」
「まさか洸夜あの子に手出すつもりじゃ・・・・」
「お前は何考えとんねん！戦い方だよ戦い方」
俺は古城に呆れた顔で言う。
ホントこいつバカとしか言いようが無いな。
それにしてもあの動き・・・・
「獅子王機関の奴か？」ボソ
「なんか言ったか洸夜？」
「いんや、何でもない」
だとしても獅子王機関が何故ここに？まさか古城を殺そうとなんてしてないだろう

な・・・
「そうか・・・・ っておい！あれ見ろ！」
「ん？アレは・・・・」
「明らかに眷獣だな」
「そろそろヤベェんじゃねえか？」
　確かにヤバいが・・・・ ここは獅子王機関のお手並みを拝見と行こうじゃ無いか。
「ちょっと待て」
「なんだよ洸夜」
「もう少し様子を見るぞ」
「何言ってんだおm「流石にヤバくなったら間に入るさ、だから安心しとけ」あ、あぁ」
　さてと獅子王機関のお手並みは如何に・・・
「っ！若雷（わかいかずち）！」
「くっ！コイツ攻魔師か！」
　おやおや、獅子王機関のお人さん少しやり過ぎては？
　そう考えていると、後ろのギターケースから武器を取り出した。
「アレは！」
「どうかしたのか？」

「‥‥　いや、何でもない」
　アレはまさか”七式突撃降魔機槍”［シュネーヴァルツァー］獅子王機関め、寄りにも寄ってアレを出してくるとは。
「ってヤバい！」
　流石にあれを食らったらいくらｄ種でもひとたまりもない。
「雪霞狼（せっかろう）！」
　俺はすかさず獅子王機関の物がシュネーバルツァーを振りかざそうとしている所に割って入る。
「そこまでだお前ら」
「っ！」
　Ｄ種の奴らも大分驚いているが、今はそんなものは関係ない。
　兎に角コイツらを逃がさないと殺られちまう。
「ホラ、チンピラども早く失せろ」
「あ、あぁ恩にきる」
　そうしてそこからＤ種のやつらを逃した。
　よぅし、これで少しはコイツも治るだろ。
「何故止めるんです！」

　あっ、全然治ってなかったわ
「あのまま殺ってたらお前が捕まるぞ」
「公共の場での魔族化、しかも市街地で眷獣を使うなんて明白な聖域条約違反です。彼は殺されても文句を言えないはずですが」
「大丈夫だろう何のために魔族登録証が有ると思ってんだ」
「そ、それは・・・・」
「第一、お前がやったとしてアイランドガードに捕まるだけだと思うが?」
　と、俺は頑張って説得する。
「分かって貰えたかな?」
「はい、分かりました」
　うむ、分かってくれて何よりだ。
「ようやく終わったのか?洸夜」
「あ、あぁ終わったぞ」
　そういえばコイツの存在忘れてたわ
「後一ついいか?あいつらより手を先に出したのお前だろ」
「ま、まぁそうですけど・・・」
「お前が何者なのか知らないけどちょっとパンツ見られたくらいでそんなもん振り回し

て殺そうとするなんてあんまりだろ。いくら相手が魔族だからって」
え？
「ま、まさか見たんですか？」
「え？あ、いや・・・・ でも、そのほら」
「・・・・ もういいです」
あっ、やったな古城お疲れ
「いやらしい」
と捨て台詞を残してその場から離れていった
「お疲れ古城、お前が裁判に掛けられた時は証人になってやるよ・・・・ あの子の」
「いや、何でだよ！」
「まぁまぁそう怒りなさんな・・・ ってコレは？」
そこには、財布が落としてあった。
「まさかさっきの子がってもう居ないか」
「どうするんだ？洸夜」
「確かあの子はうちの学校の中等部の制服を着てたから明日にでも学校に届けに行くか」
うちの学校は彩海学園（さいかいがくえん）という場所である。

彩海学園とは、紘神市内にある中高一貫教育の共学校。市立。生徒数は中等部が各学年１５０人前後（５クラス）、高等部が　２４０人前後（８クラス）の計１２００人弱。そのうち魔族は５０人弱。彩海学園には強力な（純粋な）魔族は少なく、留学生程度の感覚で普通の生徒たちに溶けこんで生活している。授業のカリキュラムも本土の高校とほとんど変わらない。

「ま、そうか、那月ちゃんも居るしな」

「おう、って許可書が落ちちまったな。えっと、名前は……」

「姫柊雪菜（ひめらぎゆきな）……か」

　こりゃサッサと返した方が良いな……

　こうして俺と古城は家に帰った

「あ、めっちゃ暑いの忘れて走っちまった」

　それに気づくのもそう遅くなく、後から物凄い疲労感が襲ってきたのはまた別の話

次回聖者の右腕Ⅲ

――――――――――――――――

説明

七式突撃降魔機槍

［シュネーヴァルツァー］

全金属製の銀色の長槍。獅子王機関の秘奥兵器。神格振動波駆動術式を刻印されており、魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く破魔の槍。魔族にとっては天敵ともいえる凶悪な武装であり、吸血鬼の真祖をも殺し得るといわれている。ただし武器の核として古代の宝槍の一部が使用されているため、量産が利かず、同種の武器は三本しか現存しない。変形機構を有しており、通常は半分以下の長さに折り畳んで運搬される。

聖者の右腕Ⅲ

「なぁ、洸夜」
「ん？何だ古城」
古城は朝っぱらからだらけた声で言う
もうちょいシャキッとできんのか？コイツは
「何で俺達夏休みなのに学校来てんだ？」
「お前はアホか、昨日財布落ちてたから拾ってそれ見たらここの中等部の生徒だから届けに来たんだろうが」
全く、俺中等部なんて久々に行くぞ。
ま、姫柊の担任に渡すのが一番良いって事になったのは良いがめんどくさいなぁ

その後俺と古城は中等部の職員室に行き姫柊の担任に渡そうとしたのだが、不在。
仕方なく今日は帰ることにした。
「何でこんな時に担任が居ないかねぇ」
「私がどうかしたか？」

「「うわ！」」

俺と古城の後ろにいつのまにか、身長が低く黒いドレスを着た少女（自称２８歳）南宮那月（みなみやなつき）が後ろに居た。

「何だ那月ちゃんかよ…　って痛て！」

「教師をちゃん付けで呼ぶな」

もうコレで古城が叩かれるのを何回見たことか。

「それで、お前達中等部に何の用だ？」

「昨日財布を拾ってね、学生証がこの学校だったから届けようとしたら、先生が居なくてね」

「それでボヤいたってのにいきなり現れて扇子で叩くはないだろう…」

うん、ドンマイ古城。

でもまぁ、那月ちゃんはしょうがないよこう言う人だから。

「しょうがないさ古城、だって那月ちゃんは、攻魔師だぜ？こんな事もおかしくないだろ？」

「まぁ、そうだな」

すると那月ちゃんが呆れた顔でこちらを見る

何？俺なんか悪い事言った？

「・・・　まぁ、事情があるなら良いさ」
「ありがとう那月ｔ「暁、お前は追試が迫っている事を忘れるなよ？」は、はい」
「それでは私は仕事があるのでな・・　後絃神」
ん？何だ？那月ちゃんが俺に用事なんて珍しいな。
今日は空から槍でも降ってくるか？
「へいへい」
「お前の〟アレ〟が届いている時間があったら取りに来い」ボソ
「お？そろそろって事か」ボソ
ん？アレって何かってそれは読み進めて行けば分かるさ！
ん？メタいって？知らんな
「それではな」
「「さようなら那月ちゃん」」
そして二人仲良く扇子で叩かれました。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「しかしどうしたもんかね～」
「だなぁ～」
どうすれば姫柊の財布を渡せるか古城と二人で思考錯誤を続けて居た。

「ま、考えて居ても仕方ない、古城何か飲み物買ってくるか？」
「あぁ頼むわ」
俺は古城の分も買いに自販機へ向かった
「コレで良いだろう」
ピリリリ
「何だ？電話か・・・」
その電話の主は”アルディギア国王”
「はぁ、何でこんな時に」
「・・・ もしもし」
［もしもし、私だ］
「こんな時に何でしょうか？国王様」
［済まんな、こちらも情報を手に入れてのだがな？］
「情報？一体何の？」
［絃神洸夜、お前はクリストフ・ガルドシュを知っているか？］
「あぁ、確か黒死皇派のボスが最近殺されたとかで新しく主導者として依頼された奴だろ？そいつがどうした？」
［実は今絃神島に居るとの情報が入ったのでな］

何故こんな島に来る必要があるんだ？
クリストフ・ガルドシュ……　か、今回の相手に不足はないってか？
「でも何故この島に？」
［ナラクヴェーラは知っているか？］
「確か、第九メヘルガル遺跡から発掘された古代超文明の遺産で、強大な攻撃力と学習による自己進化・修復機能を兼ね備えているって話のあのナラクヴェーラ？」
［そうだ、ガルドシュがそれを持って絃神島に侵入したらしい］
と言うことは目的はおそらく
「ナラクヴェーラの軌道と操縦か…」
［恐らくはそうだろう、それを伝えるために電話をしたのだが、済まない時間を使わせて］
「まぁ、良い情報を貰えたので良いですよ」
［後、ラ・フォリアが会いたがって居たぞ］
「……　他の人に名乗らせてくださいよ、俺の顔知ってんの国王様と女王陛下ぐらいでしょう」
［そうも行かなくてな「この人じゃない」とばかり言うのでな］
「はぁ、機会があったらでお願いします」

［ありがとう”氷結の侍”殿］
絶対狙って言ったな
「はい、それでは」
と言って国王電話を切った。
「・・・・ 今更どのツラ下げて会えば良いんだよ」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「おーい古城戻ったぞ・・・・ って何してんの？」
そこには鼻血を垂らす古城と姫柊が居た。
「この人が私の財布の匂いを嗅いで鼻血を垂らしました」
「ほう、古城まさかお前・・・・」
「違う！コレは誤解だ！」
と必死に弁解する古城すると隣から
キュルルルと可愛らしい音が聞こえてきた。
隣を見ると顔を真っ赤にした姫柊がコッチを見ている。
「ま、まさか姫柊、お前昨日から何も食ってｎ「それぐらい察せバカ」痛って！」
俺は空かさず古城の脇腹にチョップを入れる
「ホラ、サッサと返してやんな」

「分かってるよ」
　と言って財布を渡そうとする古城
「ありがとうございます・・・　ってぇ？」
　すると古城は直ぐに財布を戻す
「何やっとんだ古城」
「まぁ、な」
「？」
「財布を拾った奴に少しの謝礼ぐらいないとな」
「はぁ・・・　お前って奴は」
　コイツ、自分の金が無いからって姫柊に払わせようとしてやがる。
「よし、ほんじゃ俺が奢ってやろう」
「お？まじ！」
「その子の分だけ」
「何でだよぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
――――――――――――――――――――――――
　そんなこんなで俺達はマ●クに来ている。
　え？マイクにしか見えない？知らんがな

マ●クはマ●ク何だよそれ以上でもそれ以下でも無い。
それにしても・・・・・
モグモグモグ
「よく食べるねぇ」
「あっ！すみません奢って貰ってるのに・・・」
「はっはっは！良いよ良いよたくさん食べて貰っても、俺貯金たまりすぎてどう使うか迷ってたから」
「にしては俺には奢ってくれないのな」
「はぁ、しょうがないコレ食え」
俺は拗ねている古城に渋々俺のハンバーガーを渡した。
食べかけじゃ無いよ？流石にそんな事するわけ無いだろw
「良いのか？食っても」
「食わないんならやらんぞ」
「悪い悪い！食べる、食べるから！」
サッサと正直に言えば良かろうに、コイツは素直じゃ無いねぇ。
「あ、あの・・・・」
「おう、済まんね自己紹介が遅れた、俺の

名前は絃神洸夜、まぁ洸夜とでも呼んでくれて構わない、コイツとは親が知り合いでね、まぁ言う所のく腐れ縁って奴だ」
「俺は何で知ってるか分からんが暁古城だ」
「私の名前は姫柊雪菜と言います、よろしくお願します」
な、何て律儀な女の子なんや！コイツ（古城）とは大違いや！泣ける！泣けるで！
「おうよろしく姫柊」
「よろしくな姫柊」
「はい！よろしくお願します暁先輩、洸夜先輩！」
「アレ？何で俺だけ苗字」
「それは、多分俺は絃神島とほぼ見分け付かんからの話だと思うがな」
と古城と駄弁って居るが、実際俺の事を名前で呼んでくる人は結構いる。
その理由の大半が絃神島とほぼ見分けが付かないからとの事
「ところで姫柊さんや」
「はい、何でしょうか洸夜先輩」
「一応聞いておくが、あんた何者だ？」
「っ！何でそれを？」
「嫌々、そんな女の子が獅子王機関の秘奥兵器で神格振動波駆動術式が埋め込まれて居

る

七式突撃降魔機槍シュネーヴァルツァーなんてもん見せられたら驚くわ普通」

「なっ、何でコレを知って居るんですか!」

「いやね? 仕事の都合上聞いたことがあるだけだが、その槍神格振動波駆動術式のが見えたもんでねそれで判断したよ」

姫柊がこちらを怪しそうに見て居るがやがて諦めたのか、その怪しいものを見る目を辞めてくれた。

「私は獅子王機関の剣巫です」

「ほう、剣巫とは驚いた」

「なぁ、獅子王機関って何だ?」

「古城が知らなくて当然だな」

「仕方ない、〝獅子王機関〟［ししおうきかん］国家公安委員会に設置されている特務機関。大規模な魔導災害や魔導テロを阻止するための、情報収集と謀略工作が主な任務。また平安時代に宮中の霊的守護を担当していた滝口武者を源流としているため、現在でも要人の警護を行うことが多い。剣巫や舞威媛などの攻魔師を内部で養成しているほか、七式突撃降魔機槍などの武神具の開発も行っている。」

ま、こんなとこかなって待て待て姫柊さん、何でコッチを見れるんですか?

怖いですよ?

「世間では高神の杜で通って居るのに、何故洸夜先輩は裏の獅子王機関を知って居るんですか?」

「だから言っただろ?都合上って」

「それにしても不自然です!そこまで詳しい人は見たことが有りません!洸夜先輩は一体何の仕事を「まぁまぁその内知る事になるからそれまでは内緒で」っ!わ、分かりました」

「うん、宜しい」

ホントこの子ええ子やな

「っとここで本題だ、姫柊は何故古城を尾行と会うには余りにもバレて居る事をして居たんだ?」

「うっ、それは・・・・」

ありゃ、尾行の事はダメだったか

「暁先輩には、監視の為に来ました」

「は?何で俺なんかに監視が?」

「先輩は、社会的からすると、核兵器とかと同じような扱いなんです、だから獅子王機関から私が来て、監視をする事になりました」

ドンマイ古城（ ^ ω^ ）俺はこれしか言いようが無いよ
「はぁ！何で俺は生物扱いされないんだよ！」
「あっ、そこきにするのね」
「ところで洸夜先輩、先輩はこの島に自分の帝国（ドミニオン）でも築くつもりなんですか？」
「ん？まぁ、そうだな」
「おい！そこは否定しろよ！ま、待ってくれ！目的も何も俺が第四真祖になったのは今年の４月でそんな事考えてない！」
まぁ、そうだわな実際久し振りに会ったらもう既に第四真祖だったしな
「う、嘘です！人間が急に吸血鬼になんてまして真祖になるなんて聞いたことがありません！そんなの「喰ったも何も俺はただあのバカに押し付けられただけだ」
「誰ですか」
「先代の第四真祖だよ」
「先代の第四真祖！焔光の夜伯（カレイドブラッド）ですか!?」
「ああ、迷惑な話だぜ」
そのお前と居る俺も迷惑して居るんだが？
「なんで先代の焔光の夜伯が先輩を後継者に…先輩は知り合いなんですか？」

姫柊が、そう聞くと古城は顔を歪め苦痛に耐えるように頭を抱える。
「…!?悪い姫柊…おれにはその時の記憶が…無いんだ」
おいコッチを見るな姫柊さんや
「済まんな俺もその時実家に帰省していて帰ってきたらこの通り、古城が第四真祖になったって訳」
「・・・そうですか」
ねぇ、何でそんなにしょんぼりするの?
周りの目線が痛いからやめて下さいお願いします
「獅子王機関からは、害が有ると思えば抹殺して良いと言われていましたが、先輩はそれ程酷い人とは思えないのでこのまま監視を続けます」
「おう、それは良かったな古城」
「良くねぇよ!何で俺は殺されて良い命令があんだよ!」
あっ、やっぱそこなのね
まぁ、そこからは雑談だの何だのしてお開きになった
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
帰宅後
「ふぃ〜じゃ、また明日な古城、姫柊ちゃん」

「ひ、姫柊ちゃん？」
「古城も姫柊だし俺もそれだったら読者も読みにくいだろ？」
「ここに来てのメタ発言辞めろ」
「ま、まぁ事情は分かりましたそれでは」
とお辞儀してくる姫柊ちゃん
「あ、どうせなら雪菜ちゃんでいいか」
「はい、その方がしっくり来るかと」
「ほんじゃまたな～」

―――――――――――――――――――――

古城が住むアパートの部屋の前
ガチャ
「姫柊、アパートの部屋も隣なのか」
「ええ、監視役ですから」
次回　聖者の右腕　Ⅳ

―――――――――――――――――――――

説明
剣巫

［けんなぎ］

獅子王機関に仕える攻魔師。剣を扱う巫女という程度の意味。一瞬先の未来を見る霊視を得意とし、優れた戦闘能力を持つ。主任務は単独での魔族・魔獣の撃破。その数は非常に少なく、現役の剣巫は雪菜を含めて三十名に満たない。

聖者の右腕Ⅳ

「辞め」
　静寂の中、教室の中に響く那月ちゃんの声
「あ～終わった～」
「・・・　よし、今回はこれくらいで良いだろう」
「お？終わったか古城」
　俺は暇なので古城の追試について行った
「それにしても、良かったな古城これくらいで済んで」
「あぁ、そうだな・・・　そういえば那月ちゃん」
「先生をちゃん付けで呼ぶな」
　ヤベェ、那月ちゃんの後ろから黒いオーラ出てるわ
　因みに今頃だが、那月ちゃんは俺の他に古城の体質を知る唯一の人物だ
「那月ちゃ・・・　先生、獅子王機関って知ってますか？」
「！おい暁それをどこで聞いた！」
　凄い形相でこちらに詰め寄ってくる那月ちゃん、こりゃまずい事になったな。

「い、いやちょっと小耳に挟んだっつうか」

「・・・はぁ、しょうがない・・・・・教えてやる。あいつらは国家攻魔士としての私の商売敵だ。それにあいつらは暁古城、お前の天敵でもある。精々出くわさないようにするんだな」

ヤベェじゃん、出くわす以前に既に監視されちゃっとるやん

そう危機感をい抱かざるを得なかった俺であった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

次の日古城は他の追試があるようで学校に行って居る。

え?俺は行かないのかって?俺も行ったらやらされるから嫌だ。

「それにしても暇だから、本でも読むか」

数時間後

「ふぃ～これぐらいでいいかな」

ちょうど俺が本を読み終わったその時

ドオォォォオォオォオォオォン!

「うわ!な、ナンダァ?」

思わず変な声出しちまったじゃねぇか

「あっちは倉庫の方か・・・見に行ってみるか、あっ、その前に」

プルルル

「あ、もしもし那月ちゃん?あれ取りに行きたいんだけど、分かったすぐ行く」

俺は黒い〝死覇装〟を来て家を出た

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

その頃姫柊達は

そこには姫柊と一人の男が立っていた。

「その槍、七式突撃降魔機槍(シュネーヴァルツァー)ですか。神格振動波駆動術式と呼ばれる魔力無効化術式を組み込まれている。よもやこんなところで見られるとは」

「いいでしょう娘!このルードルフ・オイスタッハ、ロタリンギアの殲教師の名において貴女の相手をしましょう」

姫柊は譜を唱えると素早い動きで槍を相手に向け攻撃をしかける。

「なんというパワー……それにこの速度! 成る程、これが獅子王機関の剣巫ですか!」

「やりなさい!アスタルテ!」

するると殲教師の背後から青い髪の女の子が出てきた。

「命令受諾(アクセプト)。執行せよ(エクスキュート)、薔薇の指先(ロドダクテユロス)」

アスタルテはでかい眷獣の腕を出し姫柊を襲うが槍で相殺する。だがアスタルテが

奇声を上げると腕をもう一つだし姫柊を襲う。
「しまっ!?」
姫柊がそう叫び介入しようとすると一人の人物が出てきた。
「姫柊いいいい!!」
古城が叫びながらアスタルテの腕を殴り飛ばし姫柊を助けた。
「先輩!なんでここに!?」
「お前が心配だからにきまってるだろ姫柊。それであいつらはなんだ」
「ロタリンギアの殲教師と名乗っていますが目的がわかりません」
姫柊がそう言うと古城は姫柊の前に立ち相手の二人を睨みつける。
「ほう、いい目だ。それに先程の魔力…只の吸血鬼ではありませんね。貴族と同等かそれ以上‥‥。まさか、第四真祖の噂は事実ですかな?」
「なあおっさん、悪いけど引いてくれねえかなあ」
「引けません。我々の目的には膨大な魔力が必要なのです」
「さぁ、喰らいなさい!」
そうしてオイスタッハが武器を振りかざそうとした瞬間
ガキン!
その瞬間オイスタッハの武器が弾かれた

そこには黒い死覇装を着て、刀身の長い刀を持っている洸夜が居た

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「洸夜（先輩）！」

「済まん少し遅れた」

「何者ですかぁなたは！」

俺はオイスタッハに向かい合わせになる

「なぁに、名乗るほどのものでも無いさ」

「ですが、貴方は私の武器を弾いた、それは即ち、貴方は魔術師！」

「残念」

俺はオイスタッハの懐に潜り込もうとする

「アスタルテ！」

「ちぃ！」

するとと目の前にホムンクルスが立ちはだかる

「しょうがねぇなぁ、こんな所で使う気は無かったんだが」

「おい、何をする気だ洸夜！」

「まぁ、見てなって古城」

俺は刀に力を込める

「はぁ！」
「その尋常では無い何か、貴方やはり！」
「だからちげえって、強いて言うならそうだな、氷結の侍とでも名乗って置こうか」
「何⊠氷結の侍！」
「まさか！アルディギア王国を千もの兵隊を一人で相手をし、守り抜いた伝説の英雄、氷結の侍！まさか洸夜先輩がそうだったなんて」
　驚いているようだが、まだまだだな
「だから言っただろ雪菜ちゃん、いずれ分かるって」
「そうですか、貴方が氷結の侍、相手にとって不足なしという事ですか、アスタルテ！」
　するとオイスタッハが後ろのホムンクルスに命令する
「命令受諾（アクセプト）。執行せよ（エクスキュート）、薔薇の指先（ロドダクテユロス）」
「お前ら俺を甘く見過ぎだ」
「なっ！」
　俺は一瞬にしてオイスタッハの目の前に接近する
「姿が見えない・・・・　まさか、空間制御魔法だと⊠」
「違うな、ただお前達が”捕らえられていない”だけだし、空間制御魔法でも無いコイツは”瞬歩”って言ってな、高速で移動する事に寄って、あたかも消えたように見えるだ

けさ」

そう悠長に話していると後ろからホムンクルスが攻撃してくる

「洸夜！」

「だから、俺を甘く見過ぎだ」

俺は軽々とホムンクルスの攻撃を避ける

「しょうがない、折角手加減してやったのに、ここまでやらせるとはな」

「さぁ、貴方の力を見せてください！氷結の侍！」

「そこで一つ筆問だ」

「？」

「今ここで死ぬか、地獄に落ちるか選びな」

「！」

何ビビってんだコイツ？

手加減してやってる人の優しさを受け取らないでいるからこうなるんだ

「お前らが言う魔力とは俺のは違って居てね、”霊圧”と言うんだがそうだな、例えるなら真祖と同じ魔力だと思ってもらっていい」

「なっ、真祖と同じだと！」

「さてここでもう一度質問だ、今ここで死ぬか、地獄に落ちるか選びな」

　するとオイスタッハはホムンクルスに向かって命令する
「アスタルテ!ここは一先ず撤退です」
「了解」
　ホムンクルスは眷獣を使い、穴を開けて逃走した。
「ま、賢明な判断だろうな」
「だ、大丈夫か!洸夜!」
「おう、大丈夫だ」
　すると雪菜ちゃんが寄ってくる
「まさか、洸夜先輩が氷結の侍だったなんて」
「辞めてくれ、その呼び名は俺には相応しくない」
「なぁ、氷結の侍って何だ?」
「先輩知らないんですか?数年前、誘拐され殺されかけたアルディギアのお姫様を助け、そして相手は千もの兵隊にも関わらず、それを一人で戦いアルディギア王国を守った英雄ですよ?ですが誰もその姿を見た事はなく、唯一分かるのが、氷の刀を持っているという証言が多いため、氷結の侍と名付けられてんです」
「ほぉ～よく知っているねぇ」
「って何で今まで黙ってたんだよ!」

そんなに努力つけなくてもいいじゃないか、まぁ、教えてない俺も俺なんだが・・・・
「まぁ、そう言うなよ、実はコイツが届いて無かったもんでね」
「ん?あぁ、その刀か?」
「そ、俺の相棒”氷輪丸”コイツを修理に出してたもんでね」
「だから洸夜先輩はそれまで何も持っていなかったと?」
「ご名答」
「でも第四真祖レベルで珍しいですよ?氷結の侍って」
え?そうなの?いつの間にそんなランクが上に・・・・ まぁ、いっか帰って飯食お
「そろそろアイランドガードがくる頃だ、逃げるぞ」
「あぁ（はい）！」
次の日俺と古城と雪菜ちゃんが職員室に呼び出された。
ヤベェ心当たりねぇ・・・・ 裁かれない事を願うか。
「お前達を呼んだのは昨日の件についてだ。アイランド・イーストで騒ぎが起きたのは知っているな?」
「ええまあ、応戦しましたし」
「実はそれ以外にもここ最近、吸血鬼を狙った事件が同じ事件が多発している。今回で7回目だ」

　事件の資料をみせられた時、姫柊をナンパしてきた二人組の写真が出てきた。姫柊と古城は驚きの顔をしている。
「お前達を呼び出したのはこれが理由だ。暁古城、お前は第四真祖の吸血鬼だ。狙われる可能性が高い。十分気をつけるんだな」
「分かったよ、那月ちゃん」
　だが後から古城が付けたす
「でも、そろそろ俺も我慢の限界ってもんがあるからな、少し暴れるかも知れない」
「そこは自分で何とかしろ」
　と那月ちゃんからのきつい一言
「まぁ、やるだけやってみるさ」
　そう古城が言うと部屋を出ようとするが姫柊が那月ちゃんに呼び止められ那月ちゃんは何かを姫柊になげ渡した。
!?ネコマたん」
「お前の物だろう」
　よぉ～し帰ってゲームでもｓ「あと、絃神は少し残れ」
「・・・　因みに拒否権ｈ「そんなものお前にあるとでも?」あっハイ」
　俺本当に裁かれるかも知れねぇなｗ

その時は皆んな遺骨を拾ってくれよな！え？気持ち悪いからヤダ？皆んな扱い酷くないですかね？ね？
「おい、絃神洸夜」
「は、ハイ」
「お前・・・」
あっ、終わったなこれ、人生終了のお知らせやん。
「霊圧の出し過ぎだ、少しは抑えろ」
「え？」
「聞こえんのか？霊圧の出し過ぎだ、お前の霊圧は、魔力と違って出しすぎると人によっては体に害があるかも知れんからな、あとは処理が面倒くさい、コッチの都合も考えろ・・・　隠しきれる限度があるからな」
ＯＵ以外と真面目な話だった、良かったぁぁぁ普通の話で、死なずに済んだわ。
「分かったよ那月ちゃん」
「教師をちゃん付けで呼ぶな」
その瞬間珍しく扇子ではなく目潰しがきた。
「目がぁぁぁ

次回　聖者の右腕Ⅴ

聖者の右腕Ⅴ

彩海学園最上階

俺はある人に会うためにここにきた。

のは良いんだが・・・

「何で那月ちゃんの部屋が理事長の階の上の階何だよ、那月ちゃん偉いのは知ってるけどここまで偉いと流石にな・・・」

そう愚痴を言いながらドアノブに手を掛ける

そしてノックを三回する。

すると中から「入って良いぞ」と言う声が聞こえてきたので俺はドアを開ける。

「来たか絃神」

「そりゃな・・・　んで、何か情報は?」

「掴んで無ければ此処には呼ばん」

デスヨネ〜

俺はちょうど那月ちゃんにオイスタッハの居場所を探してもらっていて、つい先ほど連絡があり、此処にいると言うわけだ。

「んで、何処に奴等は居るんだ？」
「あぁ、その事なんだが、奴等は・・・・」
ーーー

オイスタッハめ、何を考えている・・・・

だが、分からんな・・・ 確か彼処にはこの島の衝撃などを耐える鉄の塊しか無いぞ？

「浅葱、その奥に何があるか調べてくれ！」

［はぁ、どいつもコイツも人使い荒いって］

「仕方ないだろ、緊急事態なんだから」

［分かったわよ・・・ ってえ⊠］

「ま、あとは任せたぞ」

そう言いながら電話を切り走り出す。

「来い！氷輪丸！」

すると空から氷輪丸が降ってくるが、それをキャッチしながら瞬歩で進む

「古城、頼むからもう少し持ってくれよ！」

こうして俺は急いでキーストンゲートに向かった。

ーーー

「っと、着いたぞ・・・　中はどうなってながるんだ？」
　そっと影から覗くと其処には、オイスタッハと、それに対峙するように立っている古城と雪菜ちゃんが居た。
「おっさん！アンタの目的はそれだったんだな。西欧教会に仕えた聖人の遺体、聖遺物って言うんだってな。これがアンタの目的だったわけだ」
「貴方たちが絃神島と呼ぶこの島は龍脈の上に都市を設計し、４つのメガフロートを四神に見立て龍脈の力を得ている。しかしそのためにはどうしても解決しなければならない問題があった」
「要石の強度だな」
「そうです。島が設計された当時、四神の長たる黄龍の役割を果たす強度の建材を作り出すのは不可能だった。そこで島を支える人柱として選んだのが西欧教会から奪略した聖人の遺体だったのです！決して許されることではありません！故に私は力を持ってこれを奪還します！立ち去るがいい第四真祖！これは聖遺物かけた聖戦です！」
「だからってこの町に住む５６万人が死んでもいいってのかよ！」
「この島の償うべき対価に比べたらそれぐらいの犠牲一顧だにもする価値がありません！」
「現在の技術を使えば人柱を使わずとも必要な強度の要石を作ることも可能です。訴

え、返還を要求すれば」
「貴女は聖遺物を奪われ虐げられている人達にも、同じことが言えるのですか！もはや言葉は無用！アスタルテ！」
「命令受諾（アクセプト）」
そう言うとアスタルテは己の眷獣を使い攻撃体制に入る。
「あんたには胴体を切られた仮があるんだ。さあ、決着をつけようぜ。ここから先は俺の喧嘩だ！」
そう言って攻撃に出るが姫柊が前に出て雪霞狼を振り下ろし古城に言う。
「いいえ先輩。私達の喧嘩です！」
古城や姫柊の様子を見て殲教師も本気を出す。
「ロタリンギアの技術によって造られし聖戦装備〝要塞の衣アルカサバ〟――この光を持ってわが障害を排除する！」
その装備は輝かしい光を放ち古城たちを威嚇する。
「オッサンがその気なら、こちらも遠慮なく使わせてもらうぜ。焔光の夜伯（カレイドブラッド）の血脈を継ぎし者、暁古城が、汝の枷を放つ。きやがれ！五番目の眷獣、獅子の黄金（レグルスアウルム）！」
そこに現れたのは電撃を纏った獅子。眷獣は電撃を発し殲教師の装備を破壊する。

とどめを刺そうとするがアスタルテに阻まれ攻撃を止められる。
「くそ!これでもあいつには届かないのかよ!」
古城がそう言うと姫柊が現れ古城に言う。
「いいえ先輩。私達の勝ちですよ。獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る。破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え!」
そう唱え、雪霞狼を投げ飛ばしアスタルテを一閃する。そこに古城が眷獣を使い電撃を与える。オイスタッハに姫柊が一撃を与え古城が殴り飛ばしとどめをさす。
「終わりだぜ!おっさん」
「まだまだぁ!」
オイスタッハは最後の力を振り絞って古城にカウンターを仕掛ける。
流石の古城と言えど反応が出来ない、それに加えて、雪菜ちゃんは、遠いところに居るので、攻撃を受け止めることも出来ない。
「これで終わりです!」
オイスタッハが攻撃を仕掛けようとしたその時・・・・
「縛道の六十一、六杖光牢（りくじょうこうろう）」
「な・・・　に!」
「済まないねぇオイスタッハ俺も我慢の限界なんだわ」

そこには、氷輪丸を背中に掛けている洸夜の姿があった

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

俺は六杖光牢を使いオイスタッハの動きを止める。

「洸夜!」

「待たせたな古城」

「何ですかこれは!」

「あぁ、コイツは鬼道と言ってな、その中の四つの種のうちの一つ縛道を使わせてもらった、能力は見てのとうり相手の動きを封じるだ」

俺はオイスタッハの目の前に立ち冷たい目線をオイスタッハに向ける

「分かってるだろうなお前?死ぬ覚悟があるからこの場に立っているんだよな?」

「何を言って‥‥」

そう言うオイスタッハに手のひらを向け詠唱を始める

さて‥‥ サッサと終わらせるか。

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ‥‥」

俺の手の平には大きな霊圧の塊が出来ているこれが至近距離で当たれば無事では済まない

「や、辞め・・・」
「今更遅い、お前は多くの人の命を奪った」
「オイスタッハ、お前の考えは間違いでは無いのかも知れない・・・　だが、それでこの島の人々の命を奪って良い理由にはならねぇんだよ・・・・」
　俺は最後に名前を吐く
「破道の三十一、赤火砲（しゃっかほう）」
　ドオオオオオオオオオオオン！
「ふぅ、これにて一件落着」
　俺は、オイスタッハの真横に赤火砲を打ち爆破させた。
　流石のオイスタッハでも気絶したようだ。
　ヘッ、ザマァ見やがれこのすっとこどっこい
「ありがとな、洸夜」
「まぁ、お互い様だな」
　俺は古城に安全の確認を取る
「それにしてもお前、眷獣を従えたのか」
「あ、あぁ」
「それは良かった・・・　で、眷獣を従えたと言うことは、お前吸血したな？」

俺は冷ややかな目で古城を見る。予想はしていたが、本当にやるとは・・・・

「まさかお前が中学生に手を出すとは・・・・」

「ちがっ、あれは不可抗力だ！しかもあれは脅獣を従えるために仕方なく・・・・」

「先輩、私の血を吸ったのは仕方なくだったんですか・・・・・」

「姫柊？待て・・・なんで槍を俺に向ける」

「先輩の・・・馬鹿ァァァァァ!!」

「ぎゃあぁぁぁぁ!!」

古城、ドンマイ（ ^ ∀^ ）

そう思う事しか出来ない俺であった。

ーーー

第2章　戦王の使者編

戦王の使者Ⅰ

港湾付近倉庫区画

「はぁ・・・・　はぁ・・・　はぁ」

そこを走る人影が一つ、いや獣人だけどね？

何やら何者かから逃げているようだ。

「くそ！くそ！くそ！」

獣人は黒死皇派、クリストフ・ガルドシュの部下のようだが、何故か取引の情報が漏れていて、アイランドガードが、そこに攻め込んできたと言う。

「くそ！一体何処から情報が漏れて居たんだ・・・・・　！」

獣人の男は起爆スイッチをポケットから取り出した。

「やってくれたな、人間ども・・・　同士の仇だ、思い知れ！」

カチッ

ボタンを押すが反応がない

カチッカチッカチッ

「くそ！なんぜだ！」
　その時
　ガキン！
「！」
　鎖が獣人の男が持つ起爆スイッチを奪い取る
「今時、暗号化処理もされて居ないアナログ式起爆装置か・・・・」
　そこには黒いドレスを着ている少女が佇んでいるが、獣人はすぐさま普通の人間ではない事を悟る
「攻魔師か・・・・　どうやって追いついた？」
「お前こそ、逃げれると思って居たのか？思い上がりも甚だしいな・・・・　野良猫風情が」
「ぐっ、グァァァァァァ！」
　獣人は攻魔師の少女に襲い掛かるが、避けられる。
　だが、それでは諦めず再度攻撃を仕掛ける
　だが、それを軽々と避けながら攻魔師の少女は考察する。
「察するにクリストフ・ガルドシュの部下と言ったところか・・・・　黒死皇派の死に損ないが海を渡って来てご苦労な事だ・・・・」
　そして獣人がまた攻撃を仕掛ける

「グァァァァァァ！殺すウウウウウウウ！」
だが、次の瞬間
シュン
「何⊠」
その場から先ほどまで居た攻魔師の少女がいなくなって居たのだ。
「無理だよ、貴様には・・・・」
「！空間制御の魔法⊠」
その声がした方向には先ほどまで居た攻魔師の少女が居た。
「馬鹿な・・・ そんな魔法、高位系統の魔法使いで無ければ・・・・ まさか！」
男はようやく気付いたように言う
「お前まさか・・・・ ” 空隙の魔女” 南宮那月！」
次の瞬間那月の目の前に魔法陣が出現し、魔法陣から大量の鎖が獣人に襲い掛かる。
「何！」
ーーー

そう言った瞬間
ボオオオオオオオオオオオ！
辺りには船の大きな汽笛が鳴り響いた。
ーーー

「……」
「ど、どうして姫柊が……」
古城が視線を落とす。
だが気まずくなりもう一度顔を上げると、姫柊と目が合う。
「あ、あははは……」
すると姫柊が鋭い目つきで古城を睨む。
その目には涙が浮かんでいた、相当恥ずかしかった事が伺える。
「っ!はぁ!」
「ゴハァ……」
朝から姫柊の踵蹴りを食らう古城であった…
ーーー

「おはようございます洸夜先輩」
うん、古城絶対朝やらかしたな！
と確信した瞬間であった。
「と、凪沙ちゃん久しぶり」
「うん！久しぶり洸夜君！」
うん、やっぱ凪沙ちゃんコミュ力の化け物だわ（＾∀＾）
「っと、こんな事してる場合じゃない」
「そうだな、モノレールに乗れなくなっちまう」
俺達は早足で、駅に向かった。
ーーー

まさか雪菜ちゃんに手を出したんじゃと言いかけたが古城に制止された。
そして朝起こったことを雪菜ちゃんに聞いた
「なるほど・・・　そりゃ古城が悪い」
「なんでだよ！」
は？コイツついに頭がいかれたのか？
「そりゃお前、部屋に入る時にノックするのは世間一般的に当たり前の事だろ、特に女子の部屋なんて以ての外だ」
「グッ、それを言われると言い返せない」
だが、そこに雪菜ちゃんが割って入る
「いえ、洸夜先輩アレは私の責任です」
「ひ、姫柊・・・」
「先輩がそのような人だとは分かっていました、しかも事故を装ってそのような行動を取るのは想定内だった筈です・・・　それを失念していたなんて」
そう雪菜ちゃんが言うとまたまた今度は凪沙ちゃんが割って入る
「ダメだよ雪菜ちゃん、こんな変態を許したらますます調子ｎ「だから、アレは事故なんだって」
すかさず凪沙ちゃんの言葉にツッコミを入れる古城

「ノックもしないで入って来て何が事故よ、大体今日の朝雪菜ちゃんが来るって言っておいたでしょ」
　すぐさま反論する凪沙ちゃん、俺は凪沙ちゃんに口で勝てる気がしない。
「まぁ、古城がそんな事するわけ無いだろ」
「おぉ分かってくれるのか洸夜！」
「いや、待てよ・・・　雪菜ちゃんの場合あり得なく無いな・・・・」
「どうしてそうなるんだよぉぉぉぉぉ！」
　いやぁ、古城を弄るのは楽しいなぁ～
「でも、なんでうちに？」
「朝話したでしょ・・・」
　古城人の話はちゃんと聞こうな（　^　∀^　）
「全く話聞いて無かったね」
「話してたか？」
「言ったでしょ！球技大会で使う衣装の採寸と仮縫いやってたの」
　ほぉ～そういえばそろそろ球技大会だったな
　そういえば種目何になったんだろ。
「でもなんで球技大会でそんな物を？」

「はぁ・・・　そこも聞いてなかったんだ」
物凄く長い話になりそうだなと思い俺は耳にイヤホンを付け音楽を聴き始めた。
ーーー

「・・・・ シスコンめ」
　そういや、コイツシスコンだったの忘れてた
「つっても、姫柊だけじゃ可愛そうだとかで本人もやるらしい」
「良かったじゃん」
「でもお前の事だから応援して欲しかったんじゃ無いのか？」
「いや、それさっき凪沙からも言われた」
　あっ、さいですか
　まぁ、古城とそんな話をしていると教室に着いた。
次回　　戦王の使者Ⅱ

戦王の使者Ⅱ

「うい～っす」
「おはよう」
　俺と古城は早速教室に入る。
　それと少し遅れて浅葱が入ってくる。
「おはよう浅葱」
「よっ、浅葱」
「古城と洸夜おはよう」
「はいコレ」
　すると浅葱は黒い鞄をこちらに差し出して来た。
「なんだコレ、ラケット？」
「浅葱さんや、これは何に使うんだ？」
「球技大会の練習に使うの、学校の備品だけじゃ足りないから、姉ちゃんから借りて来たの」

流石浅葱、準備が良すぎて逆に怖い気さえする。
すると黒板付近にいた基樹がニヤニヤしながら古城と浅葱を見る。
「どうした？基樹、そんなニヤニヤしながら古城と浅葱なんか見て」
「このタイミングでほぼ同じ到着とは中々運命ってやつだなコレは」
何言ってんだコイツ、古城と一緒で頭がいかれたか、若しくは・・・・
「そういえば古城、お前種目何にした？」
「え？あぁ、それならなるべく楽な種目にしておけって基樹に頼んどいたぞ」
「お前、本当やる気ないのな」
って事は、古城が基樹に種目選びをさせた、基樹がニヤニヤしている＝絶対何か企んでいる。
「んで基樹、古城と浅葱が運命ってどう言う事だ？」
「これを見ろよ、これ」
基樹は黒板の方を指して俺に言う。
「これって、黒板しかｎ・・・・」
俺が黒板を見ると、テニスダッグのペアが古城と浅葱だったのだ。
「なんで私が古城とペアなのよ！」
「今回の競技大会はバドミントンはシングルなくしてミックスダブルス増やすって言っ

てたじゃない」
「そういうことじゃなくてなんで私と古城がペアなのか聞いてるの！」
「だって好きって言ってたじゃない」
「は、はあああぁぁぁあ／／／!!」
「バドミントン」
「へ？」
「古城君も別にいいわよね？」
「まあ楽そうっちゃ楽そうな競技だしな」
　おい古城、少し状況判断をしろ。
　あ～あ、俺は知らんからな。
　すると、基樹が後ろで浅葱に何か吹き込んでいる。
　基樹、お前死ぬかもな。
ーーー

「俺が知るかよ」
　まっ、古城に聞いても拉致があかんな…
「にしても浅葱遅いなぁ、俺このまま溶けてなくなれる自信あるぞ」
「そりゃ俺もだ」
　流石にそろそろ熱くなってきたな
「しゃあない、古城飲み物買ってくるわ」
「あ、俺のも頼む」
「んじゃ、金払え」
　すると古城は「んじゃ良いやと言った」
　まさかコイツ元々俺に払わせる気だったな…
　そうな事を考えながら自販機で飲み物を買って古城の元に戻る。
「しょうがねぇからお前の分も買ってきてやった… ってなにやってんだ?.古城」
　そこには金と銀の折り紙でできたライオンの様な物体が古城に威嚇をしていた。
「またお前面倒な事起こしてないだろうな?.」
「流石にするわけねえだろ!.」
　はぁ、しょうがねぇなぁ…
「おい、獣ども」

俺が声を発するとこちらに気づいた様子でこちらにも威嚇してくる。
だが俺は、低い声でしかも威嚇するように声を放つ。
「今すぐ木っ端微塵にしてやろうか?」ニヤ
刹那ライオン?のような物の動きが止まった
「ホレ、後は頼んだぞ雪菜ちゃん」
すると後ろから雪菜ちゃんが出てきて、雪霞狼を使いそいつらに攻撃をする。
「はぁ!」
すると、ライオン?のようなものは煙の様に消えていった。
「ふぅ、危なかった…」
「大丈夫か?古城」
「そうです、怪我はありませんでしたか?」
にしてもアイツら何だったんだ?
行成古城を襲ったりなんかして。
「古城、なんでこうなったか教えてくれないか?」
「あぁ、確か洸夜を待っている間に弓矢みたいなのが飛んできたと思ったら、さっきの奴に…　って感じかな」
なるへそなるへそ、こうなると何だか嫌な予感がし過ぎてもうお家に帰りたい。

「多分、先輩を襲ったのは、式神だと思います」
「式神？」
「式神って確か、陰陽師とか霊媒とかが従える奴らのことか？」
　まさか、そんな高度な事ができる奴が居るってのか？
　そもそも古城に式神で襲わせた理由は？
「お、おい洸夜」
「おん？なんだ古城」
「コレなんだが・・・・」
　すると古城は手紙を出してきた。
「なんだ？ラブレターなら要らんぞ、俺はホモでは無いからな」
「ちげえよ！さっきの奴らがいた場所に落ちてたんだよ！」
　ほう、成る程・・・ってこのマークどっかで見覚えがある様な、無いような・・・
「先輩！そのマークまさかアルデアル公国のマークでは無いでしょうか？」
「は？」
「なんだ？アルデアル公国って」
　おいおい、なんでアルデアル公国のマークなんかが付いてるんだ？
　アイツが来ているわけでも無いし・・・

てか古城、お前本当に何も知らないのな。
「アルデアル公国ってのはな、古城……」
アルデアル公国
欧州〝戦王領域〟内にある国家のひとつ。君主はディミトリエ・ヴァトラー。領土の西側はバルト海に面しており、アルディギア王国と国境を一部接している。芸術が盛んなことで知られており、人類圏からの旅行者や移民も広く受け容れている。
「とまぁ、こんな感じだ」
「アルディギア王国ってあの？」
「そ、そのアルディギア…　ってなんでアルデアル公国しらねぇのにアルディギアは知ってんだよお前…」
本当コイツまじでわけワカメ
って、こんなことしてる場合じゃなかった。
「古城、手紙の内容は？」
「え？あ、あぁ…　って、なんじゃこりゃ！」
うるせぇ、一々大声出さんとあかんのか？
お前いっつも一回は大声出すやん。
「こんなもん入ってた」

と、手紙を差し出す古城。
へっ、どうせ大したもんじゃｎ
「は？」
「だろ？」
「どうしたんですか？お二人ともってえ？」
そりゃ雪菜ちゃんもそうなるわ……
って嫌々どうしてそうなった?!
え?!なんで?!はぁ?!（語彙力低下）
おっと済まない取り乱してしまった。
そこに書いてあってのは……
「なんでお前なんかにパーチーのお誘いが来るんだよ…」
「知るか！しかもなんだパーチーってパーティーだろ普通」
んなこたぁどうだって良いんだよ。
え？良くない？知らんがな
てか、何か忘れてる様な…
あっ
ちょうどそこに着替え終わった浅葱が登場。

こりゃ修羅場だな…　おつかれ古城（＾∀＾）
と、思いきや浅葱はアルデアル公の手紙をラブレターだと勘違いしたのか何なのか分から何が、走り去ってしまった。
俺は何も知らんぞ古城
「なぁ、古城」
「なんだ？」
「生きろよ…」
「なんだその不吉な言い方は！」
だっていつか浅葱に殺られそうじゃん
「んで、他にはなんて書いてあるんだ？」
「ん？えっと…　パートナーを一人連れてこいって書いてあるぞ？」
「ほう」
古城、そこは選ぶ人決まってるよな？
「那月ちゃんでも誘って行くか」
「は？（え？）」
だよね？雪菜ちゃんも驚くよね？
いや、鈍感とかその域超えてるぞ？

「あの、先輩…」
「?なんだ姫柊」
「もっと適任な人が居るはずですけど…」
そうだよ（便乗）
古城早く気付けや
「誰だ?」
「せい!」
「ゴフゥ!」
俺は痺れを切らし、古城に腹パンしてやった
勿論溝にな（^ ω^）
「い… きなり… なに… すん… だ…」
「いや、済まんな古城、お前が物凄く察しが悪すぎてな、ちょっと頭に来た」
「は?察しが悪いってどう言う事だよ」
なぁ、もう一回殴って良いよな?良いよね?
「お前なぁ、雪菜ちゃんが居るだろ」
「姫柊?」
「お前の監視役連れてかなくて何になる、雪菜ちゃんがあーだこーだ言われるだけだぞ

？」

「そうです先輩！私は先輩の監視役何ですから、私を連れて行くべきです！」

「そう言えばそうだな・・・」

コイツ察し悪すぎて嫌になってくる・・・・

だから鈍感って奴は・・・・

こうして古城と雪菜ちゃんはパーチーの準備、俺はふつうに帰宅した。

え？テニスはどうしたって？知らんな

次回　　戦王の使者Ⅲ

戦王の使者Ⅲ

とある研究所ある一人の男がモニタに向かって何かをしていた。
「・・・・」
その時
ガシュー
研究室の扉が開く音が聞こえ振り返る。
そこには二人の黒いスーツを着た男がいた。
すると片方の男がこう言って来た。
「嘉納アルケミカルインダストリー社開発部槙村陽介だな・・・」
その男、槙村は何が起こっているか分からずスーツの男に問いかける。
「なんだ君達は、ここはクラス6の機密区域だぞ?」
すると片方の男が
「槙村研究主任、この研究所で扱っている荷物には、魔導貿易管理令に違反する物品が入っているという疑いがある」
「なっ・・・ ま、待ってくれ、なにかの間違いでしょうここにはそんな」

訴えかける男に少女の言葉が聞こえて来た。
「クリストフ・ガルドシュ」
「！」
そこには黒いドレスを着た少女、南宮那月が居た。
「我々は先日その部下一面を拘束している」
那月は淡々と話をする中、片方の男が手錠を持ち槙村に近づく
その瞬間
ドコォ！
槙村は近づいて着た男を吹き飛ばす
「！」
もう片方の男は驚いて急いで拳銃を出そうとする。
すると槙村は瞬く間に人ではない姿、獣人となった。
「グァァァァァ！」
「やはり、未登録魔族・・・　黒死皇派の審判か・・・」
那月が冷静に考察していると獣人が襲いかかって来た。
「ガァァァァァ

那月は男を後ろに下がるよう促す。
「グゥゥゥゥゥゥゥ！」
男が獣人特有の爪で那月を切り裂こうとするが、那月はいとも容易く攻撃を避け、獣人を蹴り倒す。
「グゥ」
すると獣人の前にもう一人少女アスタルテが居た。
「アスタルテ、少しくらい手荒に扱っても構わん、そいつを拘束しろ」
「命令受諾（アクセプト）」
「ホムンクルス・・・・ こんな餓鬼が俺を止められると思っているのか！」
獣人はアスタルテを威嚇するように目の前に立つ。
だがアスタルテは何ら問題もないような顔をして
「執行せよ（エクスキュート）、薔薇の指先（ロドダクテユロス）」
アスタルテがそう唱えるとアスタルテの後ろから翼の様な物が現れた。
「グッ」
次の瞬間、翼の様な物は一瞬にして大きな白い手へと変わり獣人に襲い掛かる。
ドコォ！！！！
獣人はアスタルテの眷獣によって壁に叩きつけられる。

すると力尽きたのか、壁には獣人ではなく槙村の姿に戻っていた。
「眷獣‥‥　だと⊠どうしてホムンクルスなんかが眷獣を‥‥」
槙村はそう言いながら倒れていった。
先程のスーツを着た男が槙村に手錠をかける
「南宮教官、お陰で助かりました」
と、男は那月にお礼を言う。
「礼などいらん、働いたのは私ではない、うちの新人だ‥‥　？」
那月はふと槙村のキーボードの上に資料が置いてあるのを発見した。
「密輸品はコレか‥‥　オリジナルは？」
と、アスタルテに確認をとるが
「認識‥　確認不能、既に当施設から運び出されたものと推定します」
それを聞くなり那月は眉をひそめて呟く。
「出遅れたという訳か‥　？」
那月は槙村のパソコンの画面を見つめる‥　すると何かを見つけた様で、そこには
「ナラクブェーラだと！‥‥　何を考えている」

ーーー

オシアナスグレイブ内部

そこにはある白いタキシードで身を包んだ男と、その後ろに高校生くらいの女性が大きな袋を背負って立っていた。

「しかし、君みたいな綺麗な子がお目付役とはねぇ・・・ それで、紹介して貰えるのかな？」

と男が聞くと女性の方は

「はい、匿う積りはありません。第四真祖は・・・・・」

すると女性の目つきが変わる

「私達の敵ですから」

ここにもまた、古城を狙うものが居るなど古城も、洸夜もまだ知らない・・・・

ーーー

え？状況を説明しろ？アッハイ

ーーー

勿論拒否権は有りません、拒否してもよろしいですが、貴方の身は安全とは程遠い物になるでしょう。
そもそも何故招待状を出しましたかと言いますと、バトラー様が暁古城様の一番のご学友との事を調べ、おまけに並みの人間では無いと知った上でこれを出させていただきたいます。
服の方はこちらで用意してご自宅にお送りさせてもらいました。
迎えも９：３０に向かわせますのでよろしくお願いいたします。

バトラー秘書

こう書かれていた。
「はぁ・・・ 拒否権ない＋拒否した場合安全とは程遠い物になるでしょうってなんやねん、ほぼ脅しやんけ」
俺がそう愚痴って居ると
ピンポーン
と軽快なインターホンの音が鳴り響いた。
「え？・マジ？・もう届いたの？・」
いつ届いたか分からない手紙を読んだのは良い、それは数日前に送られてきた物だと

分かるが、この送られてきたスーツ、明らかに今日送った物だよな？
「ヤベェ、高級感パネェ・・・・　着るの嫌にｎ」
　そう言おうとした瞬間窓の奥から殺気が・・・・
「・・・・　着るか」
　こうして俺は謎の威圧（殺気）に負けて渋々スーツを着ることにした。
ーーー

は？ってなんやねん、は？って。
コッチがは？何ですけど。
「お前知ってるか？デミトリエ・バトラーってのは、言わば戦闘狂だ。そしてアイツは俺が強いと知っている・・・・ 大体察しが着いただろ？」
「お、おう・・・ 災難だな」
お前の方が災難だと思うがねぇ。
「んにしても、オシアナスグレイブ・・・ 養生の墓場とは、また悪趣味な名前なこったねぇ」
ほんと反吐がでる。
「あ、あの・・・」
すると雪菜ちゃんがモジモジと何かを言いたげにしている。
「？どうした、姫柊」
「どうしたんだい？雪菜ちゃん何か言いたい様だけど・・・」
俺と古城が質問すると、頬を赤らめながら言ってくる
「あ、あのやっぱりこの服おかしくないですか？」
え？なに言ってんの雪菜ちゃんむしろええで、マジグッドやで
すると古城が

「いや、全然・・・」
古城や、そんな目で雪菜ちゃんを見ても説得力の欠片も無いんだが・・・
案の定雪菜ちゃんに雪霞狼を向けられていた
「な、なんでコッチに向けてくるんだよ！」
「先輩が下心に塗れた顔で言うから」
「塗れてねぇよ！」
うん、相変わらずリア充やなコイツら、吹き飛ばしたくなっちゃうＺＡ☆
「・・・あと姫柊、髪飾り曲がってんぞ」
「あっ、ありがとうございます」
「珍しいね、雪菜ちゃんが髪飾りなんて」
俺ほぼ見た事ねぇや、あとで写真撮らせてもらお。
「昔、高神の杜に居た時ルームメイトに貰ったんです」
「ほぇ～、そりゃ良かったな」
「え～、剣巫の？」
古城以外といい質問すんのな。
「いえ、剣巫ではありません」
「ほ～んじゃ何か聞いても？」

「はい、剣巫ではありませんが、同じ獅子王機関の攻魔師で、今頃どうして居るか・・・・」

ほ～、昔ボッチだった俺からは想像出来ないや・・・・って上から妙に殺気が凄く来るんだが・・・

俺は気のせいだと言い聞かせた。

うん、そうしないと殺されそうだからね！

そんな雑談をしていると、専属のスタッフ的な人が俺達を船の中まで案内していった。

次回　戦王の使者Ⅳ

戦王の使者Ⅳ

♪～

オシアナスグレイブの中には、大分多くの人が集まって居た。

まぁ、ほとんどがお偉いさんかセレブや富豪だろうな・・・　ってなんでプールなんか付いてんだよ。

「場違いも良いとこだぞ俺達・・・」

「それな」

全く、古城にはちゃんとした理由があって読んで貰って居て欲しい物だな・・・　俺が来た意味がなくなる。

「古城、俺はちとこの船の中を探索してくるよ」

「お?そうか、分かった。何か会ったら連絡するよ」

さてと、オシアナスグレイブの中には何があるのかなぁ・・・・・

ーーー

そこは格納庫もようだったが、中には大量の機会が置いてあった。
「何だ?この後工事でもすんのか?‥‥ ってよく考えて見たらこれナラクブェーラじゃん!え?ドユコト?なんでバトラーなんかの船にこんな兵器乗ってるんだ?ってそんな事より早めにぶっ壊さねぇと」
俺はあらかじめ持ってきて居た氷輪丸を取り出し刀を抜こうとした時。
「誰か居るのか?」
「!」
入り口から何者かが、入って来たのである。
あの姿からするに黒死皇派の奴らか‥‥ 確か前にアルディギア国王からそんな話があった様な‥‥ まさか、バトラーがわざとナラクブェーラを格納庫に入れたりなんかしてねぇよな?
そう考えて居たその時。
ブーッブーッ
携帯のバイブレーションが鳴る。
「古城か‥‥ もしもし、どうしt「洸夜すまねぇが、今すぐ上のロッジに来てくれないか?」‥‥ なんか会ったんだな?直ぐに行く」
俺は一応ナラクブェーラの一機に爆弾を仕込ませておいた。

これが作動しない事を祈るよ…
俺は黒死皇派の奴らに見つからない様に格納庫から出て行った。
ーーー

「申し遅れてすまない、私わディミトリエ・バトラー…　我真祖ロスト・ウォーロードより、アルデアル公位を賜りし者…」
「さっきも聞いて居たが、あんたがバトラー……」
　するとお辞儀して居たバトラーが顔を上げ
「初めまして、と言って置こうか暁古城……　いや、焔光の夜伯（カレイドブラッド）我が愛しの第四真祖よ…」
　と、バトラーは古城に投げキッスをする
「「はぁ（え）?!」
　やべ、吐き気が止まらん。
　俺にしてないと分かっていても、男が男にそう言う行為をする時点で吐き気が…
ーーー

そんな事を考えていた次の瞬間
ヒュン・・・・ ガツ！
何かが物凄いスピードでこちらに飛んできて俺と古城の間をすり抜けて床に突き刺さった。
「こ、これって・・・・」
「まさか・・・」
俺と古城は一瞬だけ顔を見合わせると同時に上から何本ものフォークが降って来た。
「あっぶね」
「大丈夫か古城！」
しかも古城を重点的に倣ってやがるが、地味にこっちにも飛ばして来やがる・・・
すると上からチャイナ服を着た女が下に降りて来て直ぐに俺達の前に来た。
「雪菜から手を離しなさい、暁古城」
「え？」
「なんだ古城、コイツの知り合い？」
「いや、知らん」
え？んじゃ誰？なんで馬鹿（古城）のこと知ってんの？
「紗矢華さん！」

「「え？」」
何?!コイツ雪菜ちゃんの知り合いだと・・・！
「紗矢華？って誰だhゴフゥ」
すると紗矢華と呼ばれる女は古城をつき飛ばし雪菜ちゃんに抱きついた。
この！羨まｓゲフンゲフン破廉恥な！
「雪菜雪菜雪菜雪菜雪菜雪菜雪菜」
え？何この人怖い、抱き着いた途端雪菜ちゃんの名前連呼し始めたんやけど・・・
こりゃ流石の古城と俺でも顔をひきつらせる。
こんなやばい人初めて見た。
「久しぶりね、元気だった？」
「え、えぇ」
この人テンション高すぎやろ、珍しく雪菜ちゃん困っとるやん。
「う、ううん」
「だ、大丈夫か？古城凄い音立てて床に倒れたが・・・」
そんな話をしている中、あちらはあちらで話をしていた。
「でもどうして・・・ 外事課で多国籍魔導犯罪を担当してたんじゃ・・・」
「今でもそうよ、ここではアルデアル公の監視として付いて来たの」

なるへそなるへそ。
それならばここに居てもおかしくないけど、流石に人を突き飛ばすのはちょっと・・・
「それじゃあ、あの手紙」
「そう、彼（バトラー）に依頼されたの」
ほうほう、でも流石に殺気丸出しで送られて来て嬉しい人はいないんじゃ・・・
「それにしても体は平気？痛くない？」
「・・・・・　なんだコイツ」
過保護過ぎるやろ雪菜ちゃんに対して。
「獅子王機関もなんて酷い、私が居ない間に第四真祖の監視任務を雪菜に押し付けるなんて」
流石にそこまでは行ってない気がするんだけど・・・・
流石に古城も何か感じたのか、雪菜ちゃんに質問しようとする
「お、おい姫ｒ「呼ばないで」は？」
「貴方に雪菜の名前を呼んで欲しくない、雪菜もそうでしょ？」
嫌々なんでそんな理屈に行き着く！
てか、嫌そうじゃなくてむしろ俺からしたら雪菜ちゃん嬉しそうなんですけど！
「え？あぁ、私は・・・・」

ほら、雪菜ちゃん戸惑っとるやん。
「古城・・・」
「なんだ？洸夜・・・」
「俺が言いたい事分かるよな？」
「あぁ」
流石古城、察しが良い。
「なぁ姫柊、コイツは一体誰なんだ？」
すると雪菜ちゃんは素直に答えてくれた。
「煌坂紗矢華（きらさかさやか）獅子王機関の舞威媛です」
「あっ、さっき話していたルームメイトの人か・・・」
「舞威媛？剣巫と違うのか？」
「教えてあげる、舞威媛って物は・・・「舞威媛（まいひめ）獅子王機関に仕える攻魔師で、主に呪詛と暗殺を専門として活動、それが転じて要人警護や密偵の任務に就くようになった・・・　こんな感じだろ？」！」
「洸夜、なんでお前がそれを？」
「言った筈だぜ？仕事上こう言うもんは否が応でも知る事になるんだよ」
「違うわね」

「なに？」
　え？違うの？めっちゃ恥ずかいカッコつけてドヤ顔で言っちまったやないかい。
「主に雪菜に近付く者を抹殺するのよ…」
「いや、それ私情！」
　全然まちがえとらんかったやないかい！
　それはただの私情ですよ？ＯＫ？
「分かったらこれ以上雪菜に近付かないて」
「うわぁ、露骨な脅し…」
「何か言った？」
「イエナンデモ」
　いや怖！怖すぎるんやけど…
「どうする、古城」
　すると古城は一度バトラーの方を向く。
　バトラーは明らかに狙っていたかのごとくニヤニヤしていた。
「…　はぁ、勘弁してくれ」
　うん、お疲れ古城！（他人事）
　さぁて、今夜は楽しくなりそうだなぁ。

ああ、後バトラーにナラクの事は聞かんとな

俺達はバトラーの案内で中に入る事にした。

次回戦王の使者Ｖ？

戦王の使者Ⅴ

浅葱の部屋にて

［んで、それでお前は逃げて来た訳？］

「別に逃げて来たわけじゃ無いわよ」

浅葱は、今日の古城と姫柊の事で基樹に連絡をしていた。

「私はあの馬鹿（古城）が何かコソコソして無いか気になるだけなの」

「姫柊って子と付き合うなら堂々としてれば良いのに…　水臭いでしょうが」

どうやら浅葱は、放課後のアレ（戦王の使者Ⅱを見てね☆）の事を勘違いしている様だ。

［そりゃ、本当に付き合ってないからじゃ無いの？］

「え？」

［なのに、アイツ（古城）は姫柊ちゃんとコソコソしてる…　そうなると考えられる考えは一つだわなぁ］

と、行成の基樹の発言に浅葱は驚きを隠せなかった。

まぁ、あそこまで見れば付き合っていると誰もが思うが、基樹の考察はまるっきし当

たっていた。
「なに？」
［古城は、あの転校生に何か弱味を握られてるんだわ、きっと］
「は、はい？弱味？」
［取り敢えず古城を誘惑してみるってのはどうだ？］
「ゆ、誘惑って・・・　何で私が」
［おいおい、色仕掛けは情報収集の基本だろ？ハニートラップって奴］

明らかに電話越しでもにやけて居るのが容易に想像出来るように基樹が言う。
「基樹、あんたね・・・」
［おっと、彼女に電話する時間だ、この話はまた今度］
「ちょ、まだ話は・・・　ブツッ」
一方的に基樹から電話を切られた今の浅葱はさぞ御立腹だろう。
すると突然
ピロリン
「スパムのくせに私のフィルタ超えてくるなんて、やるじゃない」
浅葱の部屋に大々的に置いてあるモニターが約九つあるパソコンにメールが送られ

て来た。
その内容は・・・・
「解読希望？何、私に挑戦しようっての？」
すると浅葱はパソコンに向かって解読を始めるのであった。

ーーー

そういえばこれ、アルコール入って無いよな？
するとバトラーが以外・・・ と言うか、やばい事を言い出した。
「そうだな・・・ 一言で言うなら、愛し合っていた」
「ブホォ」
「愛し合っていた・・・・ ？」
「な、何行成変な事を言うんだバトラー、お陰で吹いちまったじゃねえか」
せっかくの飲み物が台無しじゃねぇか。
「あぁ、済まない。でも変な事では無いさ、本当に僕達は愛し合っていたんだよ？」
「嘘だな、実際アブロウラ、フロレスティーナは、余り寄り付かないと聞く・・・ それにお前は戦闘狂、アブロウラに接点があるとはいえ思えない」
「これは手厳しい・・・ だが、真実は真実、だから愛を語り合おうじゃないか、暁古城」
すると古城はすぐさまソファーの後ろに退避した。
まぁ、そうなるわなホモじゃない限り。
「待て待て！俺はアブロウラじゃ無い！」
「しかし彼女を喰った・・・ そうだろ？」
「ぐっ！」
流石に強く出られない古城。

あいつ、口喧嘩で俺に勝った事無いしなｗ
するとバトラーもソファーの後ろに飛んで行く。
まぁ、ア●ムみたいに飛ぶわけじゃなく、手を掛けてそこを重心にし飛ぶ、皆んなもやった事あるだろ？
「だから、僕は彼女の血を受け継いだ君に、愛を捧げる」
と、言いながら床に着地した。
うわぁ、めっちゃいい事言ってるようでめっちゃキモい事言ってんな～コイツ。
しかも古城もめっちゃ顔引きつってるし。
「その理屈が可笑しいってんだよ！第一俺は男だ！」
「そうだぞ、バトラーコイツはホモじゃない、女垂らしだ」
「ホモよりは良いけど、酷くねえか？それ」
古城それを気にしたら終わりだ。
すると雪菜ちゃんがバトラーに話しかけて来た。
「アルデアル公」
「君は・・・・」
「獅子王機関の剣巫、姫柊雪菜と申します」
やっぱ律儀やなぁと、思ってしまう俺である

「ふぅん・・・　ところで、古城の体から君の血と同じ匂いがするのだけど・・・」
「！」
流石吸血鬼といったところか。
流石に古城の体から血の匂いがするなんて殆ど分からんぞ？
「もしかして君が、獅子の黄金レグルスアウルムの霊媒だったりすんのかな？」
うわぁ、察しが良すぎて逆に引くわぁ。
でも、こうなると騙すのは至難の技・・・　いや、無理に等しいんじゃないかな？古城。
さて、どうする？
「そんな・・・　まさか」
と、案外驚いている紗矢華ちゃん。
え？もうちゃん付けなのかって？そりゃ古城と呼び方同じになっちゃうもん、皆んなが、読みやすいようにだよ。
え？メタイ？知らないなぁ。
「そんな事まで分かるのか?!」
おい、古城。
お前隠す気ゼロだな？
「いや、言ってみただけだよ。だけど古城の血の伴侶候補だと言うのなら、僕にとっては

恋仇って事になる」
　おい、バトラー最初の血は絶対狙っただろ。
「こ、恋仇！」
　そして何で反応しとんの雪菜ちゃん、そこはあかんやろ。
「その顔、どうやら本当に・・・」
　おうおう、メッチャニヤケとるやんけ。
　しかもこれまた狙って言ってるし・・・・
　すると雪菜ちゃんは、強制的に話を変えて来た。
「そ、それより、貴方が来訪された目的をお聞かせ下さい。そうやって第四真祖と如何わしいえにしを結ぶのが目的ですか？」
「勿論」
「「即答するな！」」
　おう…なんか被ったな。
「やっぱ古城と考え同じなんだな、今日に限って」
「そうだな洸夜、俺も丁度同じ事を思っていたよ」
　なんでこうなるのかねぇ。
「しかし別の目的もある」

と、行成真面目な顔して行って来やがるバトラー、もうギャップ凄すぎｗ

「と、言うと？」

雪菜ちゃんが質問すると聞き覚えのある名前が飛んできた。

「クリストフ・ガルドシュという名前を知っているかい？」

・・・やっぱ、今回も面倒事になりそうだな。

と思いながらも俺達はバトラーの話を聞く事にした。

次回　戦王の使者Ⅵ

戦王の使者Ⅵ

「クリストフ・ガルドシュ…確か戦王領域出身の元軍人で少しばかり名の通ったテロリストだったか？」
　まぁ、そもそもこの絃神島に上陸する事はあの人に聞いていたから然程驚く事ではないな
「あぁ、黒死皇派と言う過激派の幹部でプラハ国立選挙事件で、四百人以上の死傷者を出した…」
　ほぉ…ガルドシュは、そこまで手を出してるのか…今回は中々侮れん奴が相手になるな…
「黒死皇派ってのは聞いた事がある…けど、何年か前に壊滅したんじゃないのか？」
「それはd「さっきからの会話からすると、その黒死皇派の生き残りがガルドシュに再建を頼んだのだろう」…流石、察しが良いね絃神洸夜」
　ま、そこら辺の察しが良いって評判だからな
「まさか、そのガルドシュがこの島に来てるとか言うんじゃないだろうな？」
「おや？古城の方も察しが良いみたいだね」

「まさか！魔族特区のこの島が簡単にテロリストの潜入を許したと言うのですか?!」
まぁまぁそう興奮しなさんなや、雪菜ちゃん。
まぁ、それでも許したのには少し呆れたけどな。
「さぁね、ぼんやりしてたんじゃないのか?」
「…バトラー、少しは口を慎めよ?ここは俺の大事な居場所だ、あんま言い過ぎると切れるぞ?」
流石に自分の居場所の様な場所を悪く言われる筋合いはねぇぞ…
「侵入を許した理由?そんなの決まってるでしょ?」
と、いきなり煌坂が割って入って来た。
もう何なんコイツ相手にしてると無駄に疲れる…
「黒死皇派は差別的獣人遊技者達の集団…彼らの目的は聖域条約の破棄と戦王領域の支配権を第一真祖から奪う事…その第一歩で、この魔族特区で事件を起こし黒死皇派の現在をアピールする……テロリストの上等手段でしょ?」
はぁ…また面倒な事になるなぁ。
でも、それはそれでこちらとしては困るから暴れられないように先に確保しておくのがいいが……
「流石に上手くはいかねぇか」

俺がボソッと呟く。
すると古城は煌坂が言った事に不満を感じた様で自分で疑問をぶつけていた。
「おい、なんでここなんだよ。魔族特区なんて他にもあるだろ？」
するとバトラーは不敵な笑みを浮かべて俺たちを挑発する様な発言をしてきた。
「さぁてね？」
「バトラー、お前は何を考えいるんだ？」
その質問をすると雪菜ちゃんが続けてこう言った。
「単刀直入に言います。アルデアル公……貴方はガルドシュ暗殺の為にこの島に来たという事ですか？」
「ははっ！そんな面倒な事はしないよ」
「なに？」
コイツ……自分でなにを言っているのか理解しているのか？というより、あの倉庫のナラクはコイツは知っているのか？
或いは……
「もし、仮にガルドシュの方から仕掛けてきたら……応戦しない訳にはいかないよ」
「……成る程、奴らを嗾ける為にこんな船でわざわざ乗り込んで来たというわけか」
「古城……それは恐らく違うぞ」

「……理由を聞かせてもらってもいいかな？古城の友人よ」
「はっ！笑わせてくれる。そもそもお前は戦闘狂だ。どうせ戦う為にガルドシュを呼び出す事を目的にこの船をわざわざわ用意したんだろうな。……しかも、嗾けるだけなら乗客なんて一切載せているはずがない」
俺が一通り言い終わると最後にバトラーはこう言った。
「もし、私の身に危険が迫ったら私の眷獣がなにをしでかすか分からないよ？まぁ、この島を鎮める位は出来るだろうね……だからね……君に初めに謝っておこうと思って」
やろう……まさかこの島を本気で鎮める気だな？
そう考えると俺の中で、怒りがふつふつと湧き上がってきた。
それは古城も同じでバトラーに怒鳴り散らしていた。
「テメェ……本気で言ってんのか！」
「……折角ですがそのお気遣いは無用でしょう」
「「姫柊（雪菜ちゃん）……」」
物凄く雪菜ちゃんがかっこよく見えるんだけどさ……ドヤ顔かますと雰囲気壊れちゃうよ？ねぇ、壊れちゃうよ？
「どういう事だね？……まさか、古城が僕の代わりにガルドシュを始末してくれるとでも？でも、第四真祖より僕の眷獣のほうがおとなしいと思うけどね」

けっ！どの口が言うんだから。おとなしい眷獣だったら戦闘狂なんて呼ばれるかアホが。
「そうですね……ですが、私が第四真祖に変わって黒死皇派の残党を確保しm「その必要は無いよ雪菜ちゃん」洸夜さん？」
俺はバトラーの前に立ちはだかり今までにない殺気を放つ。
流石に放ち過ぎるとアイツが起きちまうから、そこまで挑発はできないが、ギリギリまでやってやんよ。
「今回は俺が引き受ける、お前は黙って見てろバトラー」
「フフッ、果たして君には黒死皇派の残党は狩れるのかな？」
「まぁ、見てろって。古城よりは上手くやっから」
「酷くないか?!」
まぁ、獅子の黄金を完全に扱いきれていない古城を出すより俺の方が早く終わるし。まだお前は眷獣が数匹いんだ。いつ出るかも分からんやつを戦わせる訳にはいかねぇだろうが。
「フフッこれから楽しみになりそうだ……それと獅子王機関の剣巫、君が古城の伴侶に相応しいが見極めさせてもらうよしよう」

その頃浅葱は送られて来たパズルを解き終わり背伸びをしていた。
「う～ん、これで解析完了っと。挑戦してきた割には歯応えなかったわね。でも……ナラクヴェーラーってなんだろ？」
その時浅葱の携帯に一通のメールが届いた。
浅葱はベットにダイブしメールを開く。
差出人は基樹からだ。
メール内容は……
『ハニートラップの仕掛け方』
「基樹か……いい加減にしろっての」

スマホをベットに投げ枕に顔を疼くめる浅葱。
「二人だけの秘密……か」
こんな些細な呟きは古城に届く事はなかった。

場所は変わりオシアナスグレイブ。
バトラーと煌坂が帰っていく二人を見つめていた。
「面白くなりそうだね」
「……」
煌坂の方はなにかを考えておる様だが、明らかにバトラーは楽しんでいるのが伺える。
「おい、バトラー」
「ん？なんだい、まだ居たのか絃神洸夜」
「いんや、俺も今帰るところだ……」
俺はバトラーの横を通り過ぎる際にこう囁いた。

「お前がこの島を潰すのが早いか、俺がお前を潰すのが早いか……試してみるか？」
「……いや、辞めておくよ」
それを聞いた俺はそのままオシアナスグレイブを去っていった。
俺が去っていくのを見送るとバトラーは更に口角を上げた。
その笑みはさながら……悪魔と言った感じだろうか。
「全く……本当に面白くなりそうだ」

洸夜が去った船内で、ある作業員が話していた。
「なぁ……この船ってこんな寒かったか？」
「いや、そんな訳ないだろ。ここは常夏の島だ、冷房を入れすぎたんだろ」
片方の作業員は特に気にしていなかったが、もう一人の作業員がとあることに気づいた。
「この船ってここまで滑りやすかったか？」

「さぁな……さて、さっさと仕事終わらせるぞ」
そう言って二人の作業員は仕事を開会するのであった。
だが、この船内が寒いのも床が滑りやすくなっているのも全て洸夜の持っているアレがやった事を誰も知らない。